

「仕事と家庭」の両立

—— エリザベス・ギaskellの場合 ——

足 立 万寿子

1

女性にとって「仕事と家庭」の両立は大きな問題である。イギリス 19 世紀に生きた女性作家エリザベス・ギaskell (Elizabeth Gaskell, 1810-65) もやはりこの問題を抱えていた。ギaskell の実人生での出来事その他、彼女の手紙や作品を通して彼女の人生観、女性観を探ることで、「仕事と家庭」の両立についての彼女の考えを明らかにしてみたい。

2

ギaskell は処女長編小説『メアリ・バートン』 (*Mary Barton*, 1848) を発表後 1 年半ほど経ったころ、親友エリザベス・フォックス (Elizabeth Fox, 愛称トティ Tottie) に宛てた 1850 年 4 月付の手紙のなかで次のように自己分析を行っている：

One of my mes is, I do believe, a true Christian — (only people call her socialist and communist), another of my mes is a wife and mother, and highly delighted at the delight of everyone else in the house, Meta and William most especially who are in full extasy. Now that's my 'social' self I suppose. Then again I've another self with a full taste for beauty and convenience whh is pleased on its own account.¹⁾

ギヤスケルのこの分析によると、第一の自分はクリスチャンとして神への信仰に生きる自分で、この自分を人々は共産主義者や社会主義者と呼んでいる。第二の自分は家庭の主婦として家族のために生きる自分で、この自分が社会的存在だとギヤスケルは考えている。第三の自分は自分自身のためにいろいろなことを楽しみ、快適で豊かな人生を送るためにある自分である。このようにギヤスケルは自分を三つの側面を持った存在だと捉えている。

さらに、確固たるユニテリアンであったギヤスケルは、トティ宛ての 1850 年 2 月付の手紙のなかで、

... I do believe we have all some appointed work to do, whh no one else can do so well; Wh. is *our* work; what *we* have to do in advancing the Kingdom of God; and that first we must find out what we are sent into the world to do, and define it and make it clear to ourselves, (that's *the* hard part) and then forget ourselves in our work, and our work in the End we ought to strive to bring about.²⁾

と書いている。つまり、人間は誰も神から与えられた仕事を持っており、それは他の誰よりもうまくできる仕事であって、その仕事が何かを見極めるのは難しくとも、それを見出して遂行するように最大限努力すべきだとギヤスケルは考えている。

この考えをギヤスケル個人の人生に具体的に当てはめると、小説執筆は第三の自分、すなわち自分個人にとって楽しみであり、自分の人生を豊かにしてくれるものである。しかし同時にこれが神から与えられた仕事でもあるので、第一の自分は全力をあげてこの仕事を遂行しなくてはならない。そしてこれらの三つの自分のうち、どれかを優先しなくてはならないときには、上記と同じ 1850 年 2 月付の手紙のなかで、

One thing is pretty clear, *Women*, must give up living an artist's life, if home duties are to be paramount.³⁾

と述べているように、第二の自分、つまり家族のための自分を最優先すべきだとギaskellは考えているといえよう。すなわちギaskellにとっては作家であるよりも主婦であることのほうが大切だといえる。

なお、これらの三つの自分の間に折り合いがつかないときにはギaskellは、

How am I to reconcile all these warring members? I try to drown myself (my *first* self,) by saying it's Wm [William] who is to decide on all these things, and his feeling it right ought to be my rule, And so it is — only that does not quite do.⁴⁾

という。すなわち、夫ウィリアム (William) の意見に従うのが一番よいことだが、そうはいかないときもある、つまり自分の考えで行動することもあるとギaskellはいつている。この発言は、男尊女卑の女性観が一般的であった当時のイギリスでは、注目に値する発言である。

3

ギaskellの生きたヴィクトリア朝社会は家父長制に基づく男性中心の社会であった。旧約聖書の「創世記」や新約聖書の「テモテへの手紙 一」に記されている記事を表面的に解釈し、人は神に似せて造られ、女は男より造られた⁵⁾のであるから、女は本質的に男より劣る存在であり、男に従うべきである⁶⁾という男性優位の思想が支配的であった。またヘビに誘惑された女は罪深い存在である⁷⁾という男性に好都合の思想が当然視されていた。

19世紀のイギリスでは、18世紀後半から進展してきた産業革命が達成され、工業国として国力が飛躍的に伸展した。しかし繁栄の裏には苛酷な労働条件、都市への人口集中による劣悪な生活環境、景気に左右される失業などに苦しむ下層階級の人たちが多数存在したのである。このような苦しみを一層極端な形で背負ったのが下層階級の女性や子供たちなど社会の弱者であった。

一方、中産階級の女性たちもまた異なった形での圧迫を受けた。当時空前の発展を推進したのは、主に商工業に携わって富みを得た工場主、大店主などいわ

ゆるブルジョア階級であった。彼らは自分たちの財力を基に、中流上層階級へと地位を上昇させ、「ヴィクトリアニズム」と称される時代精神——体面への過度のこだわり、お上品な道德主義的偏見⁸⁾——を形成していった。このような状況下で男性の社会的体面を保つために、いわゆる「家庭の天使」たることを強いられ、家庭のなかに閉じ込められたのが中産階級の女性たちであった。

例えば、1850年には名誉ある桂冠詩人に任じられることになるテニソン (Alfred Tennyson, 1809-92) の、女性問題を扱った長詩『プリンセス』(*The Princess*, 1847) 第5部では、

Man for the field and woman for the hearth:
Man for the sword and for the needle she:
Man with the head and woman with the heart:
Man to command and woman to obey;
All else confusion. ...⁹⁾

とうたわれている。

また当時女性向け教訓書の作者として有名であったエリス夫人 (Mrs. Sarah Stickney Ellis, 1810-72) の『イギリスの娘たち』(*The Daughters of England*, 1842) 第1章では、

As women, ... , the first thing of importance is to be content to be inferior to men — inferior in mental power, in the same proportion that you are inferior in bodily strength. Facility of movement, aptitude, and grace, the bodily frame of woman may possess in a higher degree than that of man; just as in the softer touches of mental and spiritual beauty, her character may present a lovelier page than his.¹⁰⁾

と述べられている。

当時その道の権威者とも見なされていた作者の作品の上記の二つの引用から判断しても、この時代には男性より劣った女性は家のなかにおいて、天使のようにに

こやかにして男性に従っているのがよいことだ、という女性観が有力であったことが窺えよう。

ところがギヤスケルの周囲にはこのような女性観には縛られない人々が存在していた。ギヤスケルの両親、近い親戚、夫はいずれもみな敬虔なユニテリアンであった。ユニテリアンたちは、女性も男性と同じように自分自身で考え、判断し、行動すべきだし、自分に与えられた能力を十分に生かし、現在の言葉でいえば「自己実現」すべきだと考えた。例えば、ギヤスケルの育ての親であるハナ・ラム (Hannah Lumb) おばは結婚したのちに夫が精神障害者だと分かり、自らの意志で夫と別れ、一人娘との家庭を維持していった。その傍ら積極的に近所の人々との間の交流もはかり、地域の人々の生活を豊かにするのに貢献した。別のおばは、男性に虐げられて苦しむ女性を援護するため、地域に女性慈善協会を設立した。また別のおばは服役している女性たちに就職先を斡旋する委員会の委員になり、判事に意見を述べた。しかしおばたちは積極的に社会に出ていきつつも、女性の本来の役割は結婚し子供を育てることだと信じており、社会活動のために家庭を犠牲にすることはなかった。

ギヤスケルはおばたちの活動をそばで見ながら育ち、学齢に達してはユニテリアン派の姉妹が経営している寄宿学校で学び、成人してはユニテリアン派の牧師と結婚した。このような環境にあってギヤスケルは女性の人生における第一の務めは家庭にあるが、同時に女性もただ男性に従っているのではなく、自分の才能はどこにあるのか、自分はどんな仕事に向いているのかなどを自力で考え発見し、それを成し遂げるように努力すべきだという人生観や女性観を抱いていったと考えられる。

4

ギヤスケルのその思想が小説でどのように具現化されているかを見ていきたい。そのために彼女の作家活動を初期、中期、後期の三期に分け、それぞれの時期の作品を一つずつ取り上げて考察を加えていく。

まず、初期の短編「リビー・マーシュの三つの節目」(“Libbie Marsh's Three Eras”, 1847) を取り上げよう。

この短編のヒロイン、リビーはマンチェスターでお針子をして生活を立てている貧しい若い女性である。リビーは弟にも両親にも死に別れ、親しいといえる友人も遠方へ引っ越してしまい、不器量なため求婚してくれそうな男性もあらわれそうにもないと天外孤独な身の上を嘆いていた。ところが同じ労働者長屋に住む不治の病で寝たきりになっている少年フランク・ホール (Frank Hall) やフランクの母親で未亡人のマーガレット (Margaret) ・ホールと知り合い、彼らに愛情を注いでいくことによってリビーは、消極的で引っ込み思案であったのが、勇敢で積極的になっていき、やがて孤独を克服していく。いい換えると、寂しいからといって人からの愛を期待して待っているのではなく、積極的に人を愛するよう努力すること、つまりアシジのフランチェスコの「平和の祈り」の言葉を借りれば「愛されるよりも愛すること」¹¹⁾こそが寂しさを克服する秘訣であると知り、「愛」を実践するようになって、独力で自分の人生を生きていく、つまり自立していく。

孤独を克服していない精神的に弱いころのリビーの夢は、

... the natural though hidden hope of a young girl's heart to cheer her [Libbie] on with the bright visions of a home of her own at some future day, where, loving and beloved, she might fulfil a woman's dearest duties. ¹²⁾

と示されているように、家庭にあってよき妻よき母となることであった。

その後リビーはホール一家と知り合い、彼らに「愛」を実践することによって次第に孤独を克服し、強くなっていくが、そのときにも、

... I know I'm never likely to have a home of my own, or a husband that would look to me to make all straight, or children to watch over or care for, all which I take to be woman's natural work, ... ¹³⁾

と示されているように、女性の本来の仕事は妻として母として家族の世話をすること、という考えは変わっていない。しかし結婚できそうもないと自分を憐れん

でいたころの自立心のない弱々しかったリビーと異なって、独身女性の生き方について次のようにいう：

I must not lose time in fretting and fidgetting after marriage, but just look about me for somewhat else to do. I can see many a one misses it in this. They will hanker after what is ne'er likely to be theirs, instead of facing it out, and settling down to be old maids, and, as old maids, just looking round for the odd jobs God leaves in the world for such as old maids to do. There's plenty of such work, and there's the blessing of God on them as does it.¹⁴⁾

ここに示されているようにリビーは、独身女性にも神から与えられた仕事があり、それを自分で見極め、実行し、自立する女性の人生にも価値があるのだ、と堂々と主張している。

当時イギリスには諸事情から結婚できない女性が多く存在し、「余った女」(odd women) などと呼ばれて蔑視されていた。この短編のなかでも社会のその偏見の一端が次のように示されている。リビーの下宿先の勝ち気な娘アン・ディクソン (Anne Dixon) は結婚が決まり、リビーに結婚式の付き添い役を引き受けてくれるよう頼む。しかしリビーはかわいがっていたフランクの葬式の翌日に陽気な席に出る気にはなれないと断る。さらにアンは「愛し合っているから、ボブが酒ぐらい飲んでも気にしない」といって飲酒癖を軽んじる発言をする。それに対してリビーは、父親が泥酔のあげく一人息子、つまり自分の唯一の弟を死なせてしまったことを例に挙げ、アンを諷める。付き添い役を断られたうえに説教までされたアンは腹を立て、「あんたなんか、酒飲みの旦那も持てないオールド・ミスのかくせして」とリビーに毒づく¹⁵⁾。このような状況のなかでリビーがはっきりと独身女性の存在価値を明言することは画期的かつ意義あることである。

しかしリビーは、いわゆるフェミニストといわれる女性のように、初めから自分の意志で収入を伴う職業を持ち、男性に頼らないで自立を目指していたのではない。置かれた環境からそうならざるを得なかったのだ。神から与えられた女性本来の仕事は家庭の主婦の仕事であると信じながら、次善の生き方として独身職

業婦人の生き方を選んだのである。

5

ギャスケル作家活動中期の作品としては短編小説「半生を振り返って」(“Half a Lifetime Ago”, 1855) を取り上げたい。短編のヒロイン、スーザン・ディクソン (Susan Dixon) の半生を見ていこう。

スーザンはウェストモアランド (Westmoreland) 地方の堅実で豊かな小自作農の娘であった。ユー・ヌック (Yew Nook) と呼ばれている農家で幸せな娘時代を過ごしていたが、恋人マイケル・ハースト (Michael Hurst) と婚約を交わすころ次々苦難に襲われる。母親が風邪をこじらせ亡くなる。次いで父親がチフスで亡くなる。本人もチフスに感染し、治りはするが、若い女性としての容色を失う。やはりチフスにかかった10歳年下の弟ウィリー (Willie) は、脳に障害が残り、重い精神障害者となる。弟の世話をするという臨終の母親との約束を守るためスーザンは、婚約者マイケルの提案——ウィリーを施設に入れて結婚しようというもの——を拒否する。マイケルはスーザンの元を去り、別の女性エレノア (Eleanor) と結婚する。そのような逆境のなかでスーザンは、次第に凶暴性を呈してくる弟の面倒をみながら、親から受け継いだユー・ヌック農場を近隣の男性農場主にも勝って立派に経営していく。そのようなスーザンの強さをギャスケルはただ精神力だけでなく、

... not an ounce of unnecessary flesh was there on her [Susan's] bones
— every muscle started strong and ready for use. ¹⁶⁾

との表現に見られるように、体つきも男性に負けない筋肉質な体型になっていった、と描いている。

ところがギャスケルは、スーザンがこのように完璧に自立を果たしているにもかかわらず、この時点で小説に終止符を打とうとはしていない。「スーザンの人生というドラマにはもう一幕あったのだ」(“... there was a third act in the drama of her life.”) ¹⁷⁾ という表現で第4章を終え、小説を第5章へと進めていく。

第5章での出来事は次の通りである。すでに弟ウィリーは亡くなり、中年のスーザンは一人ユー・ヌックの家で暮らしていた。ある晩秋の夜、スーザンは雪のなかで倒れている男性を発見し、女とも思えない力を発揮して家へ運び込むが、男性はすでに凍死していた。ところが、この男性がマイケルだと分かってスーザンはまるで愛撫でもするかのように体をさすり温め始めるが、無駄であった。スーザンはマイケルの死を遺族に知らせに行く。そこでスーザンは、マイケルが家族によって、なかでも妻によって愛されていたことを目の当たりにして嫉妬のあまり脳卒中を起こし倒れる。マイケルの未亡人エレノアは、貧しいなかで売れるものは質に売って必要なものを買ひ、スーザンを看病する。回復したスーザンはエレノアとその子供たちをユー・ヌックに連れて帰る。このときの状況をギャスケルは次のように描写する：

When she [Susan] returned to Yew Nook, she took Michael Hurst's widow and children with her to live there, and fill up the haunted hearth with living forms, that should banish the ghosts.

And so it fell out that the latter days of Susan Dixon's life were better than the former.¹⁸⁾

この箇所を解釈すると、ユー・ヌックの家の炉辺 (hearth) を徘徊している「亡霊」(the ghosts) というのは、母、ウィリー、マイケルそれぞれの亡霊を意味していると考えられる。この三人は死別ないしは離別したのちも、スーザンの義務感や恋しさといった感情から、「亡霊」となってスーザンの心に憑きまとい、スーザンを悩ましていた。ところがスーザンは、生き身のエレノアや子供たちとともにユー・ヌックに新しい家庭を築くことによって、「亡霊」を追い払い、過去の重荷から解放され、その後のスーザンの人生は以前より楽しいものとなった、ということになる。

短編最終章の第5章でギャスケルが読者に伝えようとしたものは、スーザンはいかに農場主として社会的に成功を収め、自立を果たしても満足するのではなく、エレノア一家を引き取って、最終的に家庭を持って初めて幸せになるということだと考えられる。

ところで、ギヤスケルはこの短編を構成するのに独特のフラッシュ・バック手法を用いている。普通のフラッシュ・バックなら小説の初めが現在で、やがて過去に溯り、小説の最後で再び現在に戻るといった構成をとるところであろう。しかしこの短編では、第1章から第4章までにフラッシュ・バックの手法を用い、第5章を現在の先のいわば「未来」ともいうべき位置に置いている。ギヤスケルがこの手法をとった狙いは、女性は家庭を得て初めて真の幸せを手にするという考えを示している重要な第5章を読者に強く印象づけるためであったと考えられる。

6

ギヤスケルの作家活動後期に当たる1862年ごろ、作家志望の若い主婦が執筆と家事や育児に疲れたと悩みを訴える手紙をギヤスケルに寄越したことがあった。ギヤスケルは次のような返事を書き送っている：

The exercise of a talent or power is always a great pleasure; but one should weigh well whether this pleasure may not be obtained by the sacrifice of some duty. When I had *little* children I do not think I could have written stories, because I should have become too much absorbed in my *fictitious* people to attend to my *real* ones. ... When you are forty, and if you have a gift for being an authoress you will write ten times as good a novel as you could do now, just because you will have gone through so much more of the interests of a wife and a mother.¹⁹⁾

このようにギヤスケルは、主婦としての経験が作家になる栄養源となるので、子供が小さい間は家事、育児をおろそかにしないようにアドヴァイスしている。作家として後期に当たるこのときもギヤスケルの家庭優先の考えは変わっていないことが、この手紙に窺える。

この手紙から約1年後ギヤスケルの中編小説『従妹フィリス』(*Cousin Phillis*)

が『コーンヒル・マガジン』(Cornhill Magazine)の1863年11月号から1864年2月号に連載される。

『従妹フィリス』の語り手は鉄道技師見習いのポール・マニング(Paul Manning)青年である。その遠縁にあたるホールマン(Holman)一家はヒースブリッジ(Heathbridge)村でホープ(Hope)農場を営んでいる。ホールマン夫婦の一人娘フィリスは背が高く器量もよいが、それを鼻にかけることなく純真で、勉強熱心、農牧や家事で両親をよく助ける申し分のない娘である。ポールはヒースブリッジ近くに鉄道を敷設する仕事に携わることになり、仕事の合間にホールマン一家を訪問、心から歓迎される。やがてポールは上司の鉄道技師主任ホールズワース(Holdsworth)青年をホープ農場へ案内する。ホールズワースは明朗でハンサムで背も高く、学問もあり、仕事で海外へ出掛けたこともあり外国語に堪能で話題も豊富、冗談もうまく話術に長けている。つまり魅力的な青年で、ホールマン家全員から好かれる。ホールズワースも純朴で親切で知的な一家が好きになり、都会では味わえない田園生活を楽しみにしばしば一家を訪れるようになる。フィリスは田舎には見かけない都会型のホールズワースに恋心を抱くようになる。ホールズワースもフィリスを愛するようになるが、明瞭な意思表示はしない。そのようなとき急にホールズワースはカナダの鉄道工事の監督することが決まる。出発の直前ホールズワースはフィリスへ寄せる想いをポールにだけ告げ、イギリスを離れる。ホールズワースが去ったあとフィリスは苦しみ次第に弱っていく。見かねたポールがフィリスにホールズワースの想いを話して聞かせる。フィリスは再び明るくなる。ところがホールズワースはカナダでフランス系の娘と結婚することになったという手紙をポールに寄越す。ポールは浅はかな自分の行為を悔やむが、フィリスにその手紙を見せざるを得ない。手紙を見たフィリスはじっと堪えはするが、心のなかでは絶望する。やがてフィリスは熱病に倒れ生死の間をさまようが、危機を脱し、新たな人生へ一歩踏み出す。

ここで小説は終わっている。以上の内容からこの小説は、初恋に続く失恋を経験した乙女が苦悩のなかから一人前の女性へと成長する過程を描いた、いわゆるビルディングスロマン(Bildungsroman)と類別できる。

しかしギヤスケルはこの物語に次のような後日譚を付ける計画を立てていた。その後数十年も経過して、フィリスは亡き両親のあとを継ぎ、農場労働者と協力

し合って、ホープ農場を立派に経営している。この地方にチフスが流行したときにはフィリスは、伝染病の蔓延を防ぐためにホールズワース（この時点では亡くなっている）が残した図面を基に村の湿地帯に排水溝をめぐらす。また孤児になった子供を二人引き取り、独身だが、養母となって二人の子供たちと家庭を築いている。²⁰⁾

後日譚を加えるためにギaskellは『コーンヒル・マガジン』を出版しているジョージ・スミス（George Smith, 1824-1901）に連載の延長を頼もうと考えた。しかしスミスから許可を得られそうにもないと判断し、やむなくフィリスの成長を暗示するところで筆を置いた。

もし連載の延長が許されていたら、フィリスは農場主として農牧業や土木事業に携わるなど男性の仕事をこなす一方、農場労働者や孤児には愛情を注ぎ、一家の主婦として家政を執っている姿が描かれていたことだろう。ギaskellが女性の職業による経済的自立を称えつつ、女性の幸せは家庭にあるという考えを作家活動後期のこの時期にも抱いていたことが、この小説展開の計画から窺い知れる。

7

以上、ギaskellの初期、中期、後期それぞれの小説のヒロインはいずれも自らの意志で独身職業婦人を目指して自立していったのではない。置かれた環境のなかで生きるためにそうならざるを得なかったといえる。そう捉えるとヒロインたちは自主性のない受動的な存在に見える。しかしそうではない。ヒロインたちは降りかかってきた苦難に、一時的にひるみ、絶望し、迷うことはあっても、押し潰されることなく乗り越えようと自分の力で必死に努力し、その結果自立を勝ち取る。揺るぎないキリスト者であったギaskellは、苦難は神が人間に与える愛の鞭であると信じていた。女性はその苦難を男性に頼らないで独力で乗り越え、強くなっていく。ギaskellは、女性の本来の仕事は家庭の主婦としての仕事であり、家庭を持つことが幸せの根源だと信じる一方、神から与えられた女性の強さ、能力も信じ、独力で生きる、つまり自立することも幸せを増すと信じていたと思われる。

ギヤスケルはフェミニストの友人を多く持ち、彼女たちの活動に賛同したり、支援することもあった。しかし女性の権利を獲得する運動を自ら組織したり、その先頭に立つことはなかった。また自らをフェミニストと称することもなかった。

大工業都市マンチェスターに住んでいたギヤスケルは大気汚染のためしばしば健康を損ねた。また家族の健康管理は一家の主婦としての当然の務めである。そのためギヤスケルは空気の清澄な地に家を持つことを強く願った。ついにその義務兼願望を実現したのがイングランド南部の田園地帯にある邸宅「ローン」(The Lawn)の購入である。購入資金の約半額はギヤスケルが持っていた株を売却して用立て、不足分は出版社のジョージ・スミスから借りた。スミスは、将来ギヤスケルが書く小説を担保として貸した。つまりギヤスケルは小説家としてのキャリアが十分に認められており、たとえ本人は意識していなかったにせよ、世間では立派な職業婦人として通用していたといえる。さらに注目すべきことは、家の購入についてはギヤスケルは全く夫と相談しないで、というより夫に内緒で、つまり自分独りの判断で行っていることだ。

1865年10月末ギヤスケルは初めて「ローン」の家に入った。この時点では1年半に亘って連載されていた長編小説『妻たちと娘たち』(*Wives and Daughters*, 1864-66)はほぼ完成し、最後の1章を残すのみであった。11月12日の夕方ギヤスケルは「ローン」の居間で娘の三人と婿一人とともに談笑している最中に心臓発作を起こして急死する。一家の主婦としての願望と義務を果たした家のなかで娘たちに囲まれて神に召されたのである。また最後の長編『妻たちと娘たち』はギヤスケルの最高傑作と評されるだけでなく、英国小説史上においてもジェイン・オースティン(Jane Austen, 1775-1817)の小説と並び称されるほど高い評価を得ている。ギヤスケルは小説家として円熟の域に達したときに亡くなったといえよう。ギヤスケルの最期は「仕事と家庭」の理想的な両立を象徴するかのようだ。

ギヤスケルの一番上の娘メアリアン(Marianne)が母の思い出をこう語っている：

It was wonderful how her [Elizabeth Gaskell's] writing never interfered with her social or domestic duties. I think she was the best and most practical housekeeper I ever came across, and the brightest, most agreeable hostess ... ²¹⁾

メアリアンのこの発言は、ギaskellが作家業と主婦業を見事に両立させていたことを証明している。

ギaskellは本人の意識ではフェミニストではなかったし、女性の本来の仕事は家庭にあるという信念は生涯持ち続けた。しかしフェミニストたちが女性に望んだ、男性に依存しない、職業による自立も女性の人生を一層豊かにするものだと信じていたといえる。

注

- 1) J. A. V. Chapple and Arthur Pollard, eds., *The Letters of Mrs Gaskell* (Cambridge, Massachusetts: Harvard University Press, 1967), p.108.
- 2) *Ibid.*, p.107.
- 3) *Ibid.*, p.106.
- 4) *Ibid.*, p.108.
- 5) 「創世記」 1:27, 2:22.
- 6) 「テモテへの手紙 一」 2:12.
- 7) *Ibid.*, 2:14.
- 8) 青山誠子『ブロンテ姉妹 女性作家たちの十九世紀』（東京、朝日新聞社、1995年）、p.11.
- 9) Adam Roberts, ed., *Alfred Tennyson* (Oxford: Oxford University Press, 2000), p.178.
- 10) Mrs. Ellis, *The Daughters of England, Their Position in Society, Character & Responsibilities* (London: Fisher, Son, & Co., 1842), p.3.
- 11) 石井健吾編訳『フランシスコの祈り』（東京、女子パウロ会、1992年）、p.106.
- 12) A. W. Ward, ed., *The Works of Mrs. Gaskell*, 8 vols. (The Knutsford Edition, 1906; rpt. New York: AMS Press, 1972), Vol.1, "Libbie Marsh's Three Eras", pp.460-61.
- 13) *Ibid.*, p.484.

- 14) *Ibid.*, pp.484-85.
- 15) *Ibid.*, p.484.
- 16) *The Works of Mrs. Gaskell*, Vol.5, "Half a Lifetime Ago", p.315.
- 17) *Ibid.*, p.317.
- 18) *Ibid.*, p.327.
- 19) *The Letters of Mrs Gaskell*, pp.694-95.
- 20) Jenny Uglow, *Elizabeth Gaskell: A Habit of Stories* (London: Faber and Faber, 1993), p.552.
- 21) Winifred Gérin, *Elizabeth Gaskell: A Biography* (Oxford: Oxford University Press, 1976), p.143.

主な参考文献

注に挙げたものは除く。

- Dunbar, Janet. *The Early Victorian Woman: Some Aspects of Her Life (1837-57)*. London: George G. Harrap & Co., 1953.
- Pike, E. Holly. *Family and Society in the Works of Elizabeth Gaskell*. New York: Peter Lang Publishing, 1995.
- Reader, W. J. *Life in Victorian England*. London: B. T. Batsford, 1964.
- Rubenius, Aina. *The Woman Question in Mrs. Gaskell's Life and Works*. Upsala: A.-B. Lundequistska Bokhandeln, 1950.
- Sharps, John Geoffrey. *Mrs. Gaskell's Observation and Invention: A Study of Her Non-Biographic Works*. Fontwell: Linden Press, 1970.
- Spender, Dale, ed. *Feminist Theorists: Three Centuries of Women's intellectual traditions*. The Women's Press, 1983. 原恵理子・遠藤晶子・杉浦悦子・遠藤芳江・勝方恵子訳『フェミニスト群像』勁草書店, 1987年.
- 足立万寿子「「リビー・マーシュの三つの節目」にみられる愛」、『広島文教女子大学紀要』第31巻, 1996年.
- 荒井献『新約聖書の女性観』東京, 岩波書店, 1988年.
- 絹川久子『聖書のフェミニズム——女性の自立をめざして』東京, ヨルダン社, 1987年.
- ブラウン, J. P. 著, 松村昌家訳『十九世紀イギリスの小説と社会事情』英宝社, 1987年.
- 北條文緒, クレア・ヒューズ, 川本静子編『遥かなる道のり イギリスの女たち 1830—1910』東京, 国書刊行会, 1989年.
- 松村昌家『ヴィクトリア朝の文学と絵画』京都, 世界思想社, 1993年.